

修身初訓
七

三十七週年紀念
午未生新贈

社會科學
教育
教育法 修身

25136

372. /

T 1A1

22

MI 77

中等四級生用本

修身初訓

圖書 和圖書 遼



a 1 3 8 0 3 2 1 9 2 7 a

福岡教育大学蔵書

修身初訓卷之七

緒言

是中等第五年前期ニ用井シ爲編輯セシ者ナリ
卷中載ル所七章ニ分ツ、敬身、孝弟ノ艱難、報國盡
忠ノ刻苦、益世、忍耐、雅量、決斷是ナリ、諸科是ニ至
テ頗ル進ム、宜ク心カヲ悉シ、之ヲ事業ニ措ンコ
ヲ念フヘシ、

明治十五年

編者識

修身初訓卷之七

第一章

○孔子曰久鬼神ノ徳タル其盛ナルカナ之ヲ視レ
氏而モ見エス之ヲ聽氏而モ聞エス物ニ體シテ遺
ス可ラス天下ノ人ヲメ齊明盛服シテ以テ祭祀ヲ
承ケシム洋々乎トメ其上ニ在ルカ如ク其左右ニ
在ルカ如シ詩ニ曰ク神ノ格ル度ル可ラス矧ンヤ

宗盛年編輯

宮本茂任校閱

函
學

射フ可シヤ、夫微ノ顯レ、誠ノ揜フ可ヲサル此ノ如キ力ナ

○孔子曰久民ノ義ヲ務ム鬼神ヲ敬シテ之ニ遠サカル

○神ヲ瀆ス丁母レ枉レルニ循フ丁母レ、礼記

神武天皇日向ヨリ東征シ中原ヲ平定シ都ヲ大和ノ橿原ニ定メ、紀元四年、靈時ヲ鳥見ニ立テ皇祖大神ヲ祭り玉フ、詔ニ曰ク、我皇祖ノ靈ヤ、天ヨリ降鑒シ、朕力躬ヲ光助シ玉ヒ、今諸虜已ニ平キ、海内無事ナリ、以テ天地ヲ郊祀シ、大孝ヲ申フ可シト、

○崇神天皇六年、三種ノ神器ヲ大和ノ笠縫ノ邑ニ遷奉シ、天照大神ヲ祭ル、皇女豐鍬入姬ニ命シテ常ニ祀事ヲ侍掌セシム、是ヨリ先キ、列朝皆神器ヲ殿内ニ安ンシ、牀ヲ同フメ卧起ス、帝其褻瀆ヲ惧ル、故ニ此舉アリ、別ニ劍鏡ヲ模造シ、之ヲ御座ニ置キ玉フ、

○唐ノ孔戣、廣州刺史トナル、此州南海ニ瀕シ、海神ノ廟アリテ、天子ノ尊崇スル所ナリ、然レ氏祭祀ノ頃、例大風多クシテ、前ノ刺史波濤ヲ懼レ、事ヲ副官ニ委子代テ祭ラシム、廟官ノ修繕モ亦情ル、盲風作

雨常ニ多久民其害ヲ蒙ル孔幾人トナリ正直方嚴
中心樂易神ニ事ルニ誠ヲ以テス祭祀ノ期ニ及ビ
風雨アリ官屬前ノ刺史ノ例ニ循ヘト勸ムレ氏孔
幾聽ス舟ニ乗レハ風雨少ク弛ヒ陰雲破解シ日光
穿漏シ擢夫勞セス祭祀ノ時天地開明月星晴朗ナ
リ孔幾盛服シ笏ヲ執リ祭典ヲ行ス文武官屬首ヲ
俯セ各其職ヲ執ル皆海神ノ來リ享ルヲ覺ス祭事
全ク備リ風災熄滅シ人魚蟹ニ飽キ五穀皆熟シ明
年廟宮ヲ營メ規模ヲ大ニス孔幾政ヲ爲ル刑德並
ヒ行ハレ盜賊跡ヲ絶チ父老歌詠セリ

第二章

○父母過アレハ氣ヲ下シ色ヲ怡フシ聲ヲ柔ニシ
テ以テ諫ム諫メ若シ入ラサレハ敬ヲ起シ孝ヲ起
シ悦ヘハ則復諫ム説ヒサルト罪ヲ鄉黨州閭ニ得
ルト寧口孰諫メヨ父母怒リ悦ヒスシテ之ヲ撻チ
血ヲ流ストモ敢テ疾ミ怨ミス敬ヲ起シ孝ヲ起セ
礼記

○舜ノ親ニ事ヘテ悦ヒサル丁有ル者ハ父頑ニ母
嚚ニ人情ニ近カラサル力爲ナリ若シ中人ノ性其
愛惡理ヲ害スル丁無力若キハ必ス姑ク之ニ順ヘ

親ノ故舊喜^カ所ノ若キ當ニカヲ極メテ招キ致ス
ヘシ賓客ノ奉ハ當ニカヲ極メテ營ミ辨フヘシ務
メテ親ヲ悅ハシムルヲ以テ事トシ家ノ有無ヲ計
ルヘカラス又コレヲメ其勉強勞苦ヲ知ラサラシ
ムヘシ苟モソノ爲シテ易カラサルヲ見セシムレ
ハ亦安ンセス張橫渠

○人孰カ親ニ孝シ兄ニ悌セサラン唯行其心ニ副
フコト能ハサルノミ苟シ其行ヲ舍キ其心ヲ論ス
レハ則チ^ノ人皆孝子悌弟ナリ 龜井南冥正文
孝經序

○筑前國宗像郡武丸村ノ正助ハ世農夫ナリ父正

三郎極貧ニテ田宅ヲモ有セス僅ノ商賣シテ世ヲ
渡レリ子二人アリ兄ハ即チ正助ナリ妹ハ同村仁
右衛門カ妻ナリ正助母子人ノ奴婢トナリ給米ヲ
貯ヘ置キ宅ヲ買ヒ父ヲ住セケル正助能ク主人ニ
事ヘ其暇ニ山林ノ棄地ヲ開キ親ヲ養フ便トス二
十餘歳ノ頃^ニ子共ニ奉公ヲ罷メテ家ニ歸リ田貳
段許ヲ買得テ兩親ヲ養フ父酒ヲ好ミケレハ日々
少シツ、求メテ之ヲ薦ム酒家感シテ價ヲ取ラサ
ルニ至ル正助宅中ニ井ナシ毎朝ニ町餘隔レル川
水ヲ汲テ歸リ湯ニ湧シ父母ニ手水ヲ進ム或夜誤

テ父ノ扶ヲ蹈ミ泣ク其足ヲ蹈シカ如ク正三郎
六十歳中風ヲ病ミ咫尺モ歩行スルヲ能ハス正助
常ニ五六町ノ路ヲ背負ヒテ其妹ノ家ニ送迎ス一
日妹ノ家ニテ涙數行ヲ流ス妹怪ミ其故ヲ問フニ
今日父ヲ召シ他日ヨリ輕シ稍ク老衰セシヲ思
ヒ覺ヘス涙溢レシト答フ其後父正三郎七十六歳
ニテ終リ又正助痛哭ハ固ヨリナリ享保中西國蝗
災ニテ筑前モ亦頗ル害ヲ被レリ獨武丸村正助力
田ノミ少シモ害ナク秋實常歳ニ異ナラス人皆天
道善ニ福スルハ必ストスヘキヲ驚歎セリ此ノ如

キ大孝ノ者ナレハ名聲闖郡ニアフレ遂ニ藩廷ニ
聞達シ田地及米錢等ヲ賞與セラレシコト凡ソ幾
回ナルヲ知ラス其後母ハ八十六歳ニテ病死セ
リ正助悲哀父ノ没時ニ異ナラス而モ正助ハ八十
七ニテ死セリ其後藩主黒田氏正助及ヒ兩親ノ墓
ヲ修理セシメ遂ニ自ラ至テ香火ヲ供シ其曾孫源
助ヲ召シ三段八畝ノ田地ヲ賜ヒ世々稅役ヲ除カ
レタリ

○備前國淺口郡六條院村ノ民ニ子アリ兄総十郎
トシ弟ヲ市助トス早ク父ヲ喪シ祖父ト耕種ヲ力

ム、不幸ニシテ、祖父ハハ臂ヒ臂ヒトナリ、手脚モ亦疼痛ス、母子三人之ニ事ヘ、並ニ皆至孝、祖父酒及ヒ茶ヲ嗜ム、兄弟貧ト雖モ、之ヲ闕クナシ、凡ソ飲食ハ、祖父ニ進ムル所、常ニ精ニメ、自ラ喫スル所ノ者ハ、常ニ粗ナリ、食フ毎ニ、母必ス箸ヲ執リ之ニ哺セシム、濯器モ亦兄弟ト日ニ自ラ之ヲ操ル、冬夜ハ則兄弟カハルカハル祖父ノ趾ニ卧シ、其足ヲメ暖カナラシム、夏夜ハ則兄弟カハルカハル寢ズシテ蚊ヲ驅ル、兄弟孝順ステニ此ニ至ルト雖モ、而モ母ナホ或ハ怠アラシトヲ恐レ、屢之ヲ戒メテ曰ク、太父危殆朝夕

ヲ謀ラス、一旦不諱アラハ、孝ヲ欲スト雖モ、誰カ爲ニカ孝セン、爾等此ヲ念ヘ、兄弟謹諾ス、最後祖父忽チ心疾ヲ發シ、狂悖殊ニ劇ナリ、是時ニ當リ、市ハ人ノ役トナリ、家ニ在ラス、唯母ト總ト日夜睡ラス、敬ンテ之ヲ護持ス、又ニ総ニメ没ス、母總ト哀慕ニ勝ヘス、衣ヲ賣テ以テ喪祭ニ供ス、總カ父遠忌亦此ノ時ニアリ、追薦セント欲シテ、錢穀ナシ、是歲登ラサルニ會フ、國主倉ヲ發テ以テ賑濟ス、總ソノ米ヲ受ケ、即チ以テ父ヲ祭リ、毫モ食ヲ謀ル意ナシ、市モ亦遠方ニ在ト雖モ、物ヲ寄セ祭ヲ助ケ、時々微俸ヲ分

夫饋リ、或ハ書ヲ村老ニ致シテ曰ク、我母及ヒ兄、
シ窮スル、アアラハ、請必ス假貸セヨ、我歸テ即償メ、
其後繼妻ヲ娶リ、相與ニ母ニ事ス、因テ妻ニ謂テ曰
ク、不才ハ我咎ムル所ニ非ス、苟モ不孝ナラハ、即汝
ヲ出サント、是ニ繇テ妻モ亦克謹ム、瘠田若干頃ア
リ、連年祖父ノ疾ニ侍シテ、耕シ耨ルニ暇アラス、理
當ニ荒蕪スヘシ、而ノ其稼反テ他人ノ田ヨリ美ナ
リ、是レ冥々ノ中ニ之ヲ祐クル者アツテ然ルカ、國
主モ亦母子ニ米ヲ與ヘ、之ヲ嘆賞スト云フ、

第三章

○子曰ク志士仁人ハ生ヲ求メテ以テ仁ヲ害スル
ヲナシ、身ヲ殺シテ以テ仁ヲ成スヲアリ、

○孟子曰ク富貴モ淫ス、能ハス、貧賤モ移ス、能ハス、
威武モ屈ムル、能ハス、此之ヲ大丈夫ト謂ス、

○富貴福澤ハ、マサニ吾生ヲ厚フセントス、貧賤憂
戚ハ、庸テ女ヲ成スニ玉ニスルナリ、張子厚

○忠臣ハ二君ニ事ヘス、烈女ハ二夫ニ更メス、王陽

○平野國臣通稱ハ次郎、筑前福岡ノ人、藩ノ銃手タ
リ、嘗テ江戸ノ邸ニ祇役シ、路京師ニ入リ、禁闕ヲ拜
ス、既ニ江戸ニ至リ、寛永増上、二寺ニ遊ビ、其宏壯ナ

ル丁、大内ニ過絶スルヲ見テ、大ニ憤懣ス、此頃墨使
入港シ、和戦ノ議論沸騰ス、國臣之ヲ見聞シテ、幕府
諸藩トモニ恃ムニ足ラスト、武技ヲ練リ、兵書ヲ讀
ム、後長崎ニ適キ、英佛二國入港シ、幕吏其無礼ヲ甘
シ受ルヲ見テ、益憂憤ヲ抱キ、悉ク其書籍ヲ售リ、甲
冑ヲ買フ、幾クモ無シテ、攘夷ノ勅書ヲ、水戸中納言
ニ賜フト聞キ、國臣欣然トシテ、時至レリトテ、遊學
ニ託シ、姓名ヲ變シテ、潛ニ入京シ、諸名士ニ會シ、義
舉ノ意ヲ論說ス、又近衛中山諸公ニ謁見シ、頗ル愉
快トス、適幕吏入洛シテ、諸名士ヲ捕ヘテ、江戸ニ護

送シケレハ、國臣慨歎シテ、京師ヲ去リ、東西ニ奔走
シ、素志ヲ成サンコトヲ求ム、薩藩ノ依頼スヘキヲ知
リ、福岡ノ使也ト偽リ、其書函ニ、自著ノ回天管見策
等ヲ納メテ、藩廷ニ達シタリ、藩主ノ生父和泉、明春
上京シテ、一舉スルノ志アリト、密語セリ、明年、大坂
ニ上リ、諸志士ヲ會シ、島津氏ノ至ルヲ俟ツ、國臣先
入京シ、就テ密奏ヲ託ス、此書終ニ九重ニ達シ、後ニ
勅使関東ニ下向ノ日、此奏中ノ説ヲ採用セラレ、平
野二郎ノ名益顯レタリ、又自述ノ國體辨ヲ、學習院
ニ献ス、朝廷國臣等ヲ召シテ、學習院出仕トス、此時

天皇神武帝ノ陵ヲ拜シ、親征ヲ議セントシ、勅ヲ下
シ給ス、既ニメ朝議大ニ變シ、長門中將ノ警衛ヲ罷
ス、其入洛ヲ禁シケレハ、西三條中納言等七人ヲ奉
シテ、其國ニ還ル、幕吏國臣ヲ襲ヒ捕ヘントセシカ
氏、酒樓ニ遊ヲヲ以テ免レタリ、周防ニ下リ、澤前主
水正ヲ奉シ、吉野ノ義徒ニ應セントシ、播磨ニ至リ
シニ、吉野既ニ潰エヌト聞エケレ氏、止マル可キニ
非ス、但馬ニ入り、使ヲメ仙石氏ニ告シム、仙石氏其
使ヲ捕ヘテ、幕府ニ報ス、澤氏ノ從者之ヲ聞キ、京師
ニ迫リ、攘夷ノ舉ヲナサント、檄ヲ傳ヘシニ、土人志

士等、群起來聚シ、近畿大ニ動揺ス、幕吏驚キ、一二ノ
藩ニ命シテ攻撃セシム、國臣澤氏ヲ奉シテ、養父郡
妙見山ニ據リテ拒戦ス、其兵或ハ潰散シ、或ハ反應
ス、銃丸國臣カ腰骨ニ中リ、終ニ支フ可ラサルヲ知
リ、澤氏ヲ勸メテ走ラシメ、自ラ西ヲ指シテ走リシ
ニ、朝來郡網場村ノ舟中ニテ捕ヘラレ、京師ノ獄ニ
下サレケリ、明年長門藩ノ兵、輦下ニ至リシカバ、幕
吏獄中志士ノ破獄ヲ恐レ之ヲ斬ル、國臣紙筆ヲ乞
ヒ、絶命詩歌ヲ書シ、禁闕ニ向ヒ、再拜誓首シ、從容ト
シテ刑ニ就ク、國臣西鄙ノ一銃手ヲ以テ、朝廷ノ陵

夷ヲ傷ミ、妻子ヲ棄テ、四方ニ流寓シ、辛苦ヲ忍ビ、百
敗スレテ挫ケス、其志遂ケスト雖モ、亦明治維新、嚆
矢中ノ人也、

第四章

○學者最時日ヲ惜ム、丁ヲ要ス、豈時ヲ廢シ、日ヲ曠
スベケンヤ、古語ニ曰ク、天地万古アリ、此身再得ズ、
人生只百年、此日最過キ易シ、幸ニ其間ニ生ル、者、
有生ノ樂ヲ知ラサル可ラズ、虚生ノ憂ヲ懷カサル
可ラズト、此六句時々吟玩スベシ、初學知要

○善其身ヲ愛スルモノハ、能一生ヲ以テ萬載ノ業

ヲナス、或ハ一日ヲ以テ數百年ノ休ヲナス、自ラ愛
スルヲ知ラサルモノハ、其聰明ヲ以テ盛時ニ際
シ、名器ヲ操リ、徒ニ以テ其一己ノ私ヲ就スノミ、蔡清
○皇邦古代殉死ノ事アリ、垂仁帝ノ朝、野見宿禰之
ヲ恤ミ、創意土偶ヲ造リ、山陵ノ從衛トス、齊藤教善曰
久山陵人ヲ殉ス、不仁ナリ、埴ヲ以テ人物ノ象ヲ作
リ、此ヲ用テ人ニ易ヘ、以テ後世ノ法トス、然ラハ則
垂仁以後天下臣子、惴々穴ニ臨ムノ死ヲ免ル、丁
ヲ得タリ、宿祢一タヒ土ヲ搏ハシテ、千百死スヘキ
ノ人皆死セス、仁ト謂ハサルヘケンヤ、

○青砥藤網、嘗滑河ヲ過ク、誤テ錢十文ヲ水中ニ落
ス、藤網乃錢五十文ヲ出シ、炬ヲ買ヒ夫ヲ雇ヒ、水ヲ
照シテ搜索ス、竟ニ之ヲ獲タリ、或其得失ヲ償ハサ
ルヲ笑フ、藤網曰ク、然ラス、十錢小トイヘ氏、失ヘハ
則永ク世寶ヲ損ス、五十錢布テ民間ニ在リ、彼此六
十錢終ニ一錢ヲ失ハス、其利亦大ナラスヤ、聞ク者
歎服ス、藤網性施與ヲ好ミ、入ル所俸祿悉ク貧困ヲ
賑シ、自奉スルヲ甚薄ク、衣練帛ナシ、

○野中兼山ハ土佐ノ人ナリ、嘗テ江戸ヨリ歸ルニ、
預メ書ヲ郷人ニ致シテ曰ク、土佐物トシテ有ラサ

ルヲナシ、此行齋ラシ歸ル所、惟蛤蜊一艘アルノミ、
海路幸ニ恙ナクシハ、歸日ヲ以テ之ヲ饋ラント、衆
以異味ヲ嘗ムトス、日ヲ計テ歸ヲ待ツ、既ニ至レハ
則命シテ其漕スル所ヲ城下ノ海中ニ投シテ、一箇
ヲ餘サス、衆怪ミ問フ、兼山笑テ曰ク、此獨コレヲ卿
ニ饋ルノミナラス、卿ノ子孫ヲメ亦之ニ飲カシメ
ンナリ、此ヨリ後果シテ多ク蛤蜊ヲ生シ、遂ニ名産
トナル、衆始テ其遠慮ニ服ス、

○後漢蔡倫、字ハ敬仲、和帝ノ時、中常侍ニ轉シ、尚方
ノ令ヲ加フ、秘劍及ヒ諸器械ヲ監作ス、精工堅密ナ

ラサル丁ナシ、後世ノ法トス、古ヨリ書契、多ク編ム
ニ竹簡ヲ以テス、其縑帛ヲ用井ル者、之ヲ謂テ紙ト
ス、縑ハ貴フシテ、簡ハ重シ、並ヒ二人ニ便ナラス、倫
乃、造意シ、樹層麻頭、及ヒ敝布魚網ヲ用ヒテ以テ紙
ヲツクリ、之ヲ奏上ス、帝其能ヲ善ニス、是ヨリ從ヒ
用井サル丁ナシ、故ニ天下咸、蔡侯紙ト稱ス、

○柳宗元、柳州ノ刺史ト爲リ、其土俗ニ因テ爲ニ教
禁ヲ設ク、州人順頼ス、其俗男女ヲ以テ錢ニ質ス、時
ニ贖ハスシテ、子本相侔シケレハ、没シテ奴婢トセ
ント約ス、子厚爲ニ方計ヲ設ケ、悉ク贖ヒ歸サシム、

其尤貧ニシテ、力能ハサルモノハ、其傭ヲ書セシム、
相當ルニ足レハ、則其質ヲ歸サシム、觀察使其法ヲ
他州ニ下ス、一歳ノ比ホヒ、免レテ歸ル、且ニ千人ナ
ラントス、

第五章

○書ニ曰ク、若シ藥、瞋眩セサレハ、厥疾瘳ヘス、

○賢者ノ未遭遇セサルヤ、事ヲ圖リ策ヲ揆レハ、則
君其謀ヲ用井ス、惻誠ヲ陳見スレハ、則上其信ヲ然
リトセス、進仕效ヲ施ス丁ヲ得ス、斥逐又其愆ニ非
ス、是故ニ伊尹ハ鼎俎ヲ勤メ、太公ハ鼓刀ニ困ミ、百

里ハ自鬻キ、穉子牛ヲ飯ス、明君ニ遇ヒ、聖王ニ遭ニ
至ルニ及テ、籌ヲ運シテ上意ニ合ヒ、諫諍スレハ則
聽カル、進退其忠ヲ関ルヲ得、職ニ任シテ其術ヲ
行フヲ得、卑辱與深ヲ去テ、本朝ニ升リ、疏ヲ離レ、蹻
ヲ釋テ、膏粱ヲ享ケ、符ヲ剖キ、壤ヲ鋤テ、祖考ヲ光シ
之ヲ子孫ニ傳ヘテ以テ說士ヲ資ク、王子淵
○曾子曰ク士ハ以テ弘毅ナラサルヘカラス、任重
フメ道遠シ、仁以テ已カ任トス、亦重カラスヤ、死シ
テ而後ニ止ム、亦遠カラスヤ、

○顯宗天皇、初弘計王ト稱ス、其兄億計王ト共ニ難

ヲ避ケ、播磨ノ忍海部細目カ家、僮トナル會國司來
目部ノ小楯來リテ細目カ家ニ宴ス、時ニ二王燭ヲ
秉リ側ニ在リ、天皇竊ニ兄王ニ謂テ曰ク難ヲ避ケ
テ斯ニ在ルヲ數紀、名ヲ顯ス、方ニ今宵ニ屬レリ
兄王曰ク名ヲ顯シテ害セラレンヨリ、身ヲ全フシ
テ厄ヲ免シニ孰レゾヤ、天皇曰ク吾ハ去來穗別天
皇ノ孫、而シテ人ニ困事シ、牛馬ヲ飼牧ス、豈名ヲ顯
シテ害ヲ被ルニ若ンヤ、小楯亦二王ヲシテ起リ舞
ハシム、億計王起リ舞フ、既ニ了リ、天皇乃起リ舞
ヒ、遂ニ歌ニ因テ其系ヲ述玉フ、小楯大ニ驚キ、席ヲ

避^ヒケ供奉甚謹^ニリ、還テ具ニ其狀ヲ奏ス、清寧帝
ニ喜テ曰ク、朕子ノ以テ嗣トスヘキ無シ、乃迎ヘテ
官中ニ入レ、億計王ヲ立テ太子トシ、天皇ヲ皇子ト
ス、清寧帝崩スルニ及テ太子位ヲ帝ニ譲ル、帝固辭
シテ從ハス、是ニ於テ帝ノ姊飯豐青皇女朝ニ臨ミ
制ヲ稱ス、幾モ無クシテ皇女薨ス、太子璽ヲ奉シテ
勸進ス、天皇辭讓數四、乃位ニ即キ玉フ、

○前漢匡衡^{ウヰ}字ハ稚圭、父世農夫、衡ニ至リ學ヲ好ミ、
庸作シテ以テ資用ニ供ス、尤モ精力人ニ過絶ス、家
貧フシテ燭ナシ、隣舍燭アレ氏逮ハス、衡乃壁ヲ穿

テ其光ヲ引テ之ヲ讀ム、邑ノ大姓文不識、家富テ書
多キニ名アリ、衡ソレカタメニ客作シテ、償ヲ求メ
ス、書ヲ得テ遍ク之ヲ讀シ、願フ、主人感歎シ、資
給スルニ書ヲ以テス、遂ニ大學ヲ成ス、元帝ノ時、丞
相トナル、

○淮陰ノ韓信、家貧ニシテ自ラ存スルコト能ハス、常
ニ人ニ從テ寄食ス、淮陰屠中ノ少年、信ヲ侮ルモノ
アリ、衆中ニシテ之ヲ辱カシメテ曰ク、汝子長大ニ
シテ好テ劍ヲ帶フト雖モ、中情怯キノミ、能死セハ
我ヲ刺セ、能ハスンハ我力勝下ヨリ出ヨト、信コト

ヲ熟視シテ、俛シテ膝下ヨリ出テ、蒲伏ス、一市ノ
人皆信カ怯キヲ笑フ、後漢ニ仕ヘ大將軍トナリ、高
祖ニ説キ三秦ヲ破リ、兵ヲ山東ニ出シ、魏ヲ定メ、燕
趙ノ舉シ、齊ヲ撃チ、楚ノ將龍且ヲ斃シ、其勢破竹ノ
如シ、項羽懼レテ、トモニ連和シテ、天下ヲ三分ニセ
ント説カシム、信聽カス、遂ニ項羽ヲ垓下ニ殪シテ、
漢家數百年ノ基ヲ関キ、身楚王ニ封セラル、其始テ
楚ニ入ルヤ、先キニ巳ヲ辱シメシ少年ヲ召シテ曰
ク、汝等皆壯士ナリ、先ニ吾ヲ辱シメシ時、汝ヲ殺ス
丁能ハサルニ非ス、顧フニ汝ヲ殺ス比名ナシ、故ニ

忍ンテコレヲ成スノミ、

第六章

○樂正子ハ孟子ノ弟子ナリ、魯平公ニス、メテ孟
子ヲ見セシメント欲ス、嬖人臧倉、コレヲ沮ムヲ以
テ、魯君遂ニ見ズ、樂正子、孟子ヲ見テ曰ク、克君ニ告
久、君タメニ來リ見ントス、嬖人臧倉ト云フ者君ヲ
ハ、ム、君是ヲ以テ來ル丁ヲ果サ、ルナリ、孟子曰
ク、行ク之ヲ行カシムル者アリ、止マル之ヲ止ムル
者アリ、我輩ノ行ク止ル、人ノ能スル所ニアラサル
ナリ、吾カ魯侯ニ遇ハサルハ天ナリ、臧氏ノ子、焉ク

ンソ予ヲメ遇ハサラシメンヤ、

○左馬頭藤原保昌、人トナリ驍勇、膂力人ニ過ク、嘗
夜微行シテ笛ヲ吹ク時ニ太盜袴垂ト云フモノア
リ、劫シテ之ガ衣ヲ褫ント欲ス、踵行里許、刀ヲ抽キ
之ニ逼ル、保昌笛ヲ停メ、顧テ其名ヲ問フ、袴垂覺エ
ス首服ス、保昌曰ク、我嘗汝ガ名ヲ聞ク、汝亦碌々タ
ル者ニ非ス、吾ニ從テ來レト、復笛ヲ吹キ、徐行シテ
家ニ還リ、絮衣ヲ取り之ニ與ヘテ曰ク、之クハ則復
來レ、慎テ劫ヲ作ス勿レ、

○伊藤仁齋、嘗夜郊路ヲ行シニ、盜賊四五人路ニ當

リ、各劍ヲ按シテ仁齋ニ迫リ、吾徒ハ醉ハサレハ樂
マス、今酒資盡キタリ、客若シ腰纏ヲ欠カハ、請フ衣
裳ヲ脱セヨト云フ、仁齋自若トシテ曰ク、今日囊中
適空シ、敝緼袍ヲ與ヘンノミ、且汝カ輩何ヲ以テ業
トスルヤ、曰ク、昏夜ニ掠奪シテ自ラ給スルノミ、仁
齋曰ク、此ノ如クナラハ吾又何ソ拒ント、即衣服ヲ
脱シテ之ニ授ク、將ニ去ラントス、賊等仁齋ヲ止メ
テ曰ク、吾儕草竊スル丁數年、未嘗舉止、客ノ如キ者
ヲ見ス、抑モ客ハ何爲レノ者ソ、仁齋曰ク、儒者ナリ、
賊曰ク、儒者ハ何事ヲカ爲ル、仁齋曰ク、人道ヲ以テ

人ニ教フル者ナリ、人道トハ、親ニ孝シ、兄ニ弟シ、人
世一日モ無ル可ラサル者ナリ、人トシテ道ヲ知ラ
サル者ハ、禽獸ニ異ナラズト、言未タ畢ラサルニ、賊
等頓首シテ曰ク、噫、君ト我ト、鉤ク是人ニシテ、事業
ノ迥ニ異ナルコト此ノ如シ、我甚之ヲ耻メ、願クハ
吾儕ノ罪ヲ宥セ、今ヨリ灰ヲ飲ミテ胃ヲ洗ヒ、謹テ
教ヲ門下ニ奉セント、遂ニ皆心ヲ改テ、勉勵セシト
云フ、

○唐ノ郭子儀、初李光弼ト俱ニ安思順カ牙將タリ、
二人相能ラス、席ヲ同フスト、雖モ言ヲ交ヘス、後子

儀、思順ニ代テ將タリ、光弼誅セラレ、ンヲ恐レ、乃
詭キ請テ曰ク、死ハ甘心スル所ナリ、但妻子ヲ貸サ
ンヲ乞フト、子儀堂下ニ趨リ、其手ヲ握テ曰ク、今
國乱レ主辱メラレ、公ニ非スンハ定ムルヲ能ハス、
僕豈敢テ私念ヲ懷ンヤ、因テ涕泣シテ勉ムルニ忠
義ヲ以ス、即之ヲ薦メテ節度副使トス、遂ニ同ク賊
ヲ破リ、纖毫ノ猜忌ナシ、

第七章

○孔子曰ク、三軍ハ帥ヲ奪フヘシ、匹夫モ志ヲ奪フ
可ラサルナリ、

孟子曰ク夫志ハ氣ノ帥ナリ、氣ハ體ノ充ルナリ、
故ニ曰ク其志ヲ持テ、其氣ヲ暴フ丁無レ、
○成配齊ノ景公ニ謂テ曰ク、彼モ丈夫ナリ、我モ丈
夫ナリ、吾何ソ彼ヲ畏ンヤ、顏淵曰ク、舜何人ソ、予何
人ソ、爲ル丁アルモノハ是ノ如シ、公明儀曰ク、文王
ハ我師ナリ、周公豈我ヲ欺ンヤ、孟子
○立志ノ工夫ハ、羞惡念頭ヨリ跟脚こつこヲ起スヘシ、耻
ツ可ラサルヲ耻ル勿レ、耻ヘキヲ耻サル勿レ、孟子
謂ス、耻ナキヲ之レ耻ツレハ耻ナシ、志是ニ於テカ
立ツ、言志盡錄

志學ノ士、當ニ自ラ巳ヲ頼ムヘシ、人ノ熱ニ因ル勿
レ、淮南子ニ曰ク、火ヲ乞フハ燧ヲ取ルニ若ス、汲ヲ
寄スルハ井ヲ鑿ルニ若ス、巳ヲ頼ムヲ言フナリ、
名アルモノハ、其名ニ誇ル丁勿レ、宜ク自以テ名ニ
副フ所ヲ勗ムヘシ、毀ヲ承ルモノハ、其毀ヲ避ル丁
勿レ、宜ク自以テ毀ヲ來ス所ヲ求ムヘシ、是ノ如ク
功ヲ著ク、毀譽並ニ我ニ益アリ、同上

○伊藤蘭嶼博學ニシテ文ヲ能ス、紀伊侯ニ仕ス、其
始テ侯ノ前ニ講スル時、書ニ對シテ講セス、滿坐掌
ニ汗ス、以爲ク是寒素ニ生長ス、未大人ニ説クニ慣

ハス、其巍々然タルヲ視テ然リト、中使促セトモ應
セス、侯亦コレヲ訝ル、既ニシテ蘭峴徐ニ曰ク、公、禱
ニ坐ス、聖人ノ書ヲ講ズ可ラサルナリ、侯コレヲ聞
キ、遽ニ禱ヲ去ル、是ニ於テ方ニ講説ス、音吐朗暢、辯
論明備、座者ミナ歎賞シテ曰ク、真ノ儒者ナリ、

○加茂ノ真淵、遠江ノ人ナリ、少壯ニシテ濱松ノ逆
旅梅屋氏ニ鞠ハル、其女ヲ以テ妻トス、晨夕心ヲ書
籍ニ潛メ、家事ヲ治メス、義父ノ憎ム所トナル、其妻
真淵ニ謂テ曰ク、妾子ノ才ヲ觀ルニ、豈逆旅主人タ
ルモノナランヤ、妾幸ニ一男ヲ産ス、撫字成立、以テ

家ヲ嗣カシムルニ足ル、請フ子終身ノ策ヲ決シ、名
ヲ天下ニ揚ケヨ、真淵因テ京師ニ來奔シ、荷田春満
ニ從テ學ス、爾後妻堅ク節ヲ守ル丁數十年、真淵亦
竟ニ國學ヲ以テ聞ユ、

○范仲淹ニ歳ニシテ孤ナリ、母夫人貧シテ依ルコ
トナシ、再、常山ノ朱氏ニ適ク、既ニ長シテ其世家ヲ
知り、感泣シテ去リ、南都ニ之テ學舎ニ入り、一室ヲ
掃テ晝夜講誦ス、其起居飲食、人ノ堪サル所、而ルニ
仲淹自刻シテ益苦メリ、居ル丁五年、大ニ六經ノ旨
ニ通シ、文章論説ヲ爲ル丁、必仁義ニ本ツク、

○王曾發解南省廷試ニ、ミナ首冠トナル、或コレニ
戲テ曰久、状元三場ニ試ラル、一生契著ストモ盡シ、
公色ヲ正クシテ曰久、曾平生ノ志、温飽ニ在ラス、
○明王陽明、年十一ナルトモ、師ニ問ス、何ヲカ第一
ノ事トスル、師言フ、書ヲ讀ミ及第スルノミト、陽明
曰、此レ未第一ノ事トセズ、第一ノ事ハ、其レ聖賢夕
ルニ在ランカ、

第八章

○書ニ云ク、疑ヲ蓄レハ謀ヲ敗ル、怠忽ナレハ政ニ
荒ム、學ハサレハ面ニ牆シ、事ニ莅ンテ惟煩シ、

功ノ崇キハ惟志業ノ廣キハ惟勤メ、唯克果斷ナレ
ハ後ノ艱ナシ、

○事ニ臨ンテハ、明敏果斷ヲ以テ是非ヲ辨ス、胡文定

○果斷義ヨリ來ルモノアリ、智ヨリ來ルモノアリ、

勇ヨリ來ルモノアリ、義ト智トヲ并テ來ルモノア

リ、上ナリ、徒ニ勇ノミヲ以テスルモノハ殆シ、言志晚錄

○源義經ノ鶺越ニ向フヤ、路險ニシテ夜黒シ、鶺尾

經春ヲシテ鄉導セシム、鶺越ノ險何如ト問フ、經春

曰久、太險、人馬行ヘカラス、唯鹿能コレヲ踰ユ、義經

曰久、鹿四足、馬四足、等キノミ、衆ニ先チ之ニ馳セ、鶺

越ニ至レハ則天明久城中ヲ頓視ルニ生田一谷ニ
門戰方ニ酣ナリ、義經急ニ之ニ應セント欲ス、而シ
テ懸崖數百仞、經春言フ所ノ如シ、衆相目シテ敢進
ムモノナシ、乃試ニ鞍馬ニツマ駢リ、之ヲ下ス、一ハ
傷キ、一ハ達ス、義經曰久下ルヘシ、乃其騎ル所ノ馬
ノ後足ヲ屈シ、一鞭ニシテ下ル、三千騎皆コレニ倣
ス、冑鞍相觸レ、直ニ城後ニ達ス、

○關原ノ役、德川内府マサニ江戸ヲ發セントス、石
川家成曰久、臣、皇家ノ言ヲ聞ク、今歲西方塞ル、請フ
方ヲ避テ發セヨ、内府曰久、西方塞ラハ則我撃テ之

ヲ開ント、遂ニ發ス、東海道ヨリ鼓行シテ西ス、近畿
將士爭テ使者ヲ發シ、狀ヲ馬首ニ上ルモノ、絡繹道
ニ属ス、而シテ東北空虚ス、

○楚ノ屈瑕マサニ貳軫ニ盟ントス、鄭人蒲騷ニ軍
シ、將ニ隨絞州蓼ト楚ノ師ヲ伐ントス、莫敖コレヲ
患フ、鬬廉曰久、鄭人其郊ニ軍ス、必誠ジ、且日ニ四邑
ノ至ルヲ虞ル、君郊郢ニ次リテ以テ四邑ヲ禦ケ、我
銳師ヲ以テ霄鄭ニ加シ、鄭人虞心アリテ其城ヲ恃ム、
鬬志アルモノナケン、若シ鄭ノ師ヲ敗ラハ、四邑必
離シ、莫敖曰久、盍ソ師ヲ濟ス、丁ヲ王ニ請ハサル、對

テ曰ク、師ノ克ハ和ニアリ、衆ニアラス、商、周ノ敵セサル、君ノ聞ク所ナリ、軍ヲ成シテ以テ出ツ、又何ソ濟サン、莫敖曰ク、之ヲトセン、對テ曰ク、トハ以テ疑ヲ決ス、疑スンハ何ソトセント、鄖ノ師ヲ蒲騷ニ敗リ、遂ニ盟テ還レリ、

○司馬君實幼穉ナルトキ、多クノ童子ト共ニ或ル家ノ庭ニ遊ビ居ケルカ、其庭中ニ大ナル甕アリテ水ヲミテタリ、ヲリフシ一人ノ童子、ソノ甕ニヨチノホリ、甕口ノ縁ヲマハリ歩ミテ戯レタリシカ、足ヲ失シテ甕中ニ陥リタリ、多クノ童子等狼狽シテ

救フニ術ナシ、君實大ナル石ヲ拾ヒキテ、其甕ヲ打チクタクカントシタルヲ、他ノ童子ラ之ヲ碎カハ主人ノ怒リニ觸レト云フ、君實一甕ハ輕シ、人命ハ重シト云テ、石ヲ投テ甕ヲ碎キ、ソノ童子ヲ救ヘリ、成長ノ後宰相トナリ、大ニ天下ニ名アリ、齋藤拙堂カ、君實擊甕圖ニ題スル文ニ云ク、公ノ仁勇、既ニ甕ノ日ニ於テ之ヲ見ル、何ソ必ス台鼎ニ登リ、鈞軸ヲ秉ノ日ヲ待テ、而シテ後コトヲ知ランヤト、信ナリ、

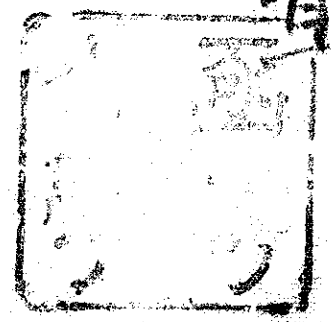
○元ノ成宗、元貞元年、陝西旱シテ饑ウ、行省右丞許

辰倉ヲヒラキ之ヲ賑ハサント議ス、同列イマタ奏
請ヲ經サルヲ以テ可トセス、宸カ曰久、民ハ邦ノ本
タリ、今饑餓カクノ如シ、モシ命ノ下ルヲ俟タハ及
ブ、丁無シ、擅ニ發クノ罪、吾マサニ之ニ任スヘシト、
遂ニ廩ヲ發ラキテ賑貸ス、命モ亦尋テ下ル、

明治二十二年二月調査

代價

修身初訓卷之七終



明治十五年三月廿四日版權免許
同年五月刻成

編輯人 福岡縣士族 宮本茂任

同縣士族 宗盛年

同縣同區地行番町二十五番地

出版所 連壁製本會社

同縣同區下名馬町十五番地